

ホームビデオと私写真を出発点にして、垣間みる台湾の多元社会

邱于瑄(チウ・ユーシュエン)／東京都写真美術館 学芸員

2019年に台北美術賞でグランプリを受賞し、台湾現代アート界の新星となったマンボウ・キー（本名はヤン・ドンチー。以下、マンボウ）が、2024年の6月から7月にかけて、東京の馬喰町にあるギャラリーparcelと表参道のH BEAUTY & YOUTHのAMATEURで本邦初となる個展を開催した。本展では、父より託された大量の映像作品をベースとしつつも、台湾がインクルーシブ社会として成熟していく過程——自己受容、ジェンダー意識、ジェネレーション・フリーなどの超克——を反映したシリーズ作が発表された。商業カメラマンとして台湾のファッション界などで活躍する一方、アーティストとして正式に活動を開始した受賞作《Father's Videotapes》のシリーズが、海を渡り日本の観者に紹介されたことで、台湾発のアート写真の異なるB面までもが浮き彫りになった。このシリーズは、言論の自由が許されなかった時代、父親が「らしさ」や「こうあるべき」からの解放のために撮り溜めたセックス・テープを、思春期だったマンボウが不意に見つけたことに始まる。マンボウはコマーシャル・フォトの分野を横断しながらも、アーティストとして、家庭での「性」への向き合い方や父子の絆、家族における相互作用を含む自身のバックグラウンドを再構築してきた。写真表現やインスタレーションをもって、既存の枠組みに揺さぶりをかけ、アイデンティティないしSOGI(性的指向と性自認)の再解釈までも試みている。

2022年に台北市立美術館で開催された大規模な個展に対し、今回、東京でのソロ・エキシビションは、セクシュアリティの流動性を軸とした台北展のハイライトだといえる。同じシリーズ作だが、それぞれのキュレーションからなるこの二つの展覧会の形態の違いから、マンボウの多様な側面をもうかがい知れる。作品を観賞する際、恐らく多くの人がLGBTQ+の 이슈、すなわちクィア的テーマに注意を引かれるであろう。しかし、展覧会をつぶさに観ていくと、マンボウと父といった親子の関係性や揺るがない家族愛を通じて、複雑な政治背景のなかで絶えず変容する台湾の社会意識ないしジェンダー・ダイバーシティが立ち上がってくる。筆者が最も印象的に残ったのは、小型のブラウン管テレビがparcelで、映像インスタレーションとしてまばらに展示されていたことだ。往時のブラウン管から、マンボウの父親が戒厳令解除以降の90年代に撮った中国訪問の映像や、マンボウが撮り続けてきた年老いた父親の日常の記録が淡々とループ再生されていた。またそれら映像は、マンボウの父親が若かりし頃——自宅での愉しみ(Home Pleasure)——として自撮りした一連のセックス・ビデオと強烈な対照を成している。白色テロといった社会情勢が非常に厳しかった時代にせよ、世間に異様と見なされた自身の家族像にせよ、これらすべてがマンボウの成長過程で「性」と「自我」に対する自由な想像力を培った素因であることは明らかで、この

ようなイメージーションやコンセプトをもとに、マンボウは大胆かつセンセーショナルな写真のシリーズ作を展開してきた。父親が過ごした厳しいあの頃と今という同時代における多様な意識のあり方を巧みにない交ぜにした東京展の一部作品は、まるでマンボウと父親の間を往還する奇妙な旅への誘いのようにであり、同時に過去から現代に至るまでの台湾人の家族観や世相の移り変わりまでもがすくい上げられている。

個人、家族、さらには世代を跨る多様な姿を呈した《Father's Videotapes》にとどまらず、性意識の目覚めやジェンダーバイアスからの解放などといったテーマで作品を発表し続けるマンボウは、台湾の写真界にも新たな風を吹き込んだ。カメラの進化により、誰でも簡単にきれいな写真が撮れる現代において、マンボウの作品群を通じて、他者理解とプライベートフォトの相関ないし私的写真の定義が刷新されつつある。ギャラリーPARCELでの初個展に合わせて、マンボウ本人が父親に託された大事なビデオテープをハンドキャリアで日本へ持ち込もうとしたところ、単なるいかがわしいポルノであると判断されてしまい、空港の税関検査場で止められてしまった。懸命な説明と交渉の末、滅却ではなく台湾へ帰国するまでの“一時預かり”でいったん事は収まったものの、残念ながら実際のビデオテープを思い通りに展示することは叶わなかった。マンボウは予期せぬ没収の一件をリプレゼンテーションするかのよう、背表紙ラベルに手書きで状況説明をした空ビデオによる映像インスタレーションにつくり変え、それと同時に、改めて“新作”を通して、芸術表現に対する社会的枠組み、国情の違いについても問いを投げかけた。

一見すると無秩序に展示されている、二つの展示空間におけるその他多くの作品もまた、どれも絶妙な構図であることはもとより、個々の配置方法はどこか写真という^{しきい}關を跨ぐ、ドイツ出身の写真家ヴォルフガング・ティルマンズを彷彿させ、日常から滲み溢れ出す感情の細部が微細に絡みとられている。個人的な経験や小さな感覚が、どのようにして台湾が歩んだ政治的・社会的大きなことと繋がっているかを、アート写真で表現するマンボウの台北での個展は、現地でも多くの議論を引き起こした。強烈なスタイルを持つマンボウの写真や映像作品が、海を越えて、異なる文化的コンテクストを持つ東京で初めて披露された。来場者がどのような視座や観点で作品と対話をし、どのような反応を示したのかはさておき、本展が台湾発の新世代の写真家が海外進出する大きな一歩となったことに違いない。

翻訳：池田リリィ茜藍